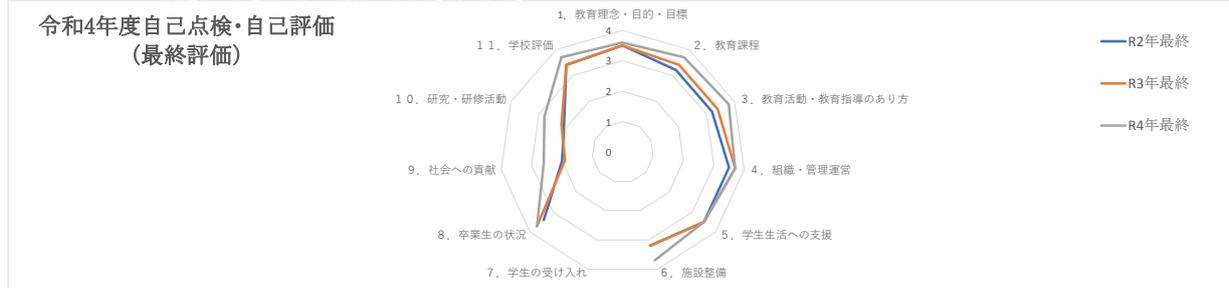


令和4年度自己点検・自己評価委員会(最終)

富山病院附属看護学校

○ 大項目 評価点平均

評価基準: 4点:適切、3点:ほぼ適切、2点:やや適切、1点:不適切



○ 大項目における令和4年度の概要と課題

1. 教育理念・目的・目標 (3.6)

カリキュラム改正における求められている課題を組み込みながら、教育理念に基づいた、目的・目標の達成に向け、COVID-19感染拡大状況をとらえつつ、実習施設と連携して、臨地実習が可能な限り実施できるように準備、調整し、学習が継続できるように工夫と調整を実施している。今年度もコロナ禍での実習、学校生活で8月の臨地実習で精神、在宅実習を除いた1クール分と12月の看護統合実習が学内シミュレーション実習となり、実習が継続できるよう迅速に対応できた。今年度の3年生は1年次から臨地実習が中止となり、臨地実習に行ける機会が少なかったため、看護実践力の向上が課題であった。臨地実習に参加できたこと、学内シミュレーション実習でも実際にイメージできるように指導した結果、成長はみられている。変化する社会状況に合わせて、学生が学べる環境を事前に準備やその都度検討し、体制づくりを図り、教育理念をもとに、教育目的、目標に向かって教育活動を行った。今年度の卒業生の学校カリキュラム評価で、「1. 教育方針は明確に示されている」について「そう思う、大いにそう思う」と回答が約74%であった結果からも、学生にも理解されていたと評価する。

2. 教育課程 (3.7)

講義は、感染予防対策を講じながら対面で行うことができた。臨地実習ではCOVID-19の流行によって臨地実習先の受け入れが難しい場合や学生が濃厚接触者となった場合、実習方法を学内実習に変更し対応、教育を行った。そのため実習グループによって臨地実習の経験が少ない状況があったが、昨年に比べ多くの実習を臨地で経験することができ、専門職業人として成長することができた。また、最後の統合実習は全てが学内実習となり、患者にケアする経験学習はできなかったが、学内実習の良さを活かし、学生の気づき、複数患者の優先順位の判断をする考え方について場面設定をして教育できた。またケーススタディでは、事例をまとめ発表をすることで再度自分の行った看護の意味を考えることができた。

3. 教育活動・教育指導のあり方 (3.8)

今年度はCOVID-19の感染拡大状況を考慮しながら、対面授業や臨地実習を重視し、学生が学習しやすい環境になるよう調整した。一部、リモート授業・学内実習を余儀なくされたが、その中でも、看護技術の実施にあたっては登録してもらいながら臨床判断能力を養うための学習教授方法を工夫した。今年度に必要な学習は全生が目標到達した。また、教員の負担や偏りのないよう実施できている。実習指導過程評価・授業評価についても継続して実施しており、結果についてはフィードバックし教授方法の工夫をしている。新カリキュラムの視点を持ち臨床判断能力を養えるよう、領域別実習では実習指導者と協働してカンファレンスなどを活用し、学生が観察したことや記録してきたことをもとに指導を進めた。また、統合実習はこれまでの学びを統合する上で学生生活最後の場でもあるため、会議を利用し学習内容の協議を重ねて実施した。学生はこれまでの学校生活の中で、学習時間の確保、学習方法の習得など自ら学ぶという姿勢が培われてきたと考える。

4. 組織・管理運営 (3.7)

新型コロナウイルスの感染拡大のための実習形態の変更による学習への影響を最小限にし、各専門領域における目標を十分に到達できるよう、教員会議などの定例会には全教員が業務調整をし、学校組織として役割を果たすため協議を重ねた。また、閉校年度であり学生全員の学びを保障するため、主担任と副担任により日々協議を重ねている上に、週に1回の学年ミーティングの場を設け一貫した指導につながるよう心がけ組織として取り組むことができた。その成果として、最終学年の全員が卒業目標に到達できたと考える。

5. 学生生活への支援 (3.6)

学生支援体制のシステムがあり、適切に稼働して。感染拡大状況に応じて、対面授業と遠隔授業、実習体制など柔軟に対応し、教授方法を工夫しながら実施することができた。感染拡大防止、感染予防のため、全教員で健康管理指導、感染予防行動の指導を行った。また、実習では、必要な検査・受診ができるように調整し、規定を遵守しながら実習が円滑に進めることができた。学習、就職の支援については、学生個々に合わせて対応している。今年度で閉校となるため、学習、就職支援、国家試験対策など計画的に進め、進路状況などの確認を行った。奨学金制度を含む支援については、必要な学生に面談を取り入れ、適切に説明がされており、学習継続できる環境を提供できていると考える。経済的問題を抱える学生もおり、最後まで学業が継続できるように、必要時には制度の説明を行っている。学生寮運営に関しては、宿舎の老朽化や入寮者が少ないこと、維持費など、学生のみで対応が難しい状況にあった。寮生活の維持や生活指導など寮担当教員を中心に日々支援と指導が必要であった。教育主事、事務、寮担当教員が協力し、寮生活が継続できるように支援をし、今年度をもって、閉寮となった。

6. 施設整備 (3.5)

COVID-19流行に伴い、感染症予防のため、窓の換気を積極的にを行い、密にならないように学習環境を整えているが、今後も継続が必要である。閉校にあたり2学年不在で生じた空き教室を利用し、各座席の間隔を開けるよう工夫を行い、憩いの場となるようゆったりとした空間作りを心掛けている。しかし、学生個々の行動範囲は、ほぼ決まっており各々が好んでそれぞれの環境・施設を使用している状況もある。古い建物で、限りある状況であるが、落ち着いた環境を提供できていると考えられる。施設利用に関しては感染状況をみつつ対応を行い、制限がある場合でも学習できる時間帯を確保すること、学生の居場所となるスペースの提供を行っていくことが必要である。図書貸し出しに関しては、紛失防止のために鍵管理を行っている。蔵書点検では、所在不明のものもあり、紛失ゼロとは行かなかったが、今年度は2冊のみであった。図書室利用に手順が多いことに懸念はあったが、学生が安全に、また適切に貸出が行えるように調整できたと考える。教材に関しても、点検管理を行い、学習に必要なものを担保することで学生に不利益が被らないよう整備できたと考える。

7. 学生の受け入れ

8. 卒業生の状況 (3.7)

就職は、おおむね学生の目指す看護師像に沿いながら相談のり支援できたと考える。学習が停滞している学生に対し面接し学習に専念するよう関わったことは、全員卒業につながったと考える。看護実践能力の育成では、臨地実習経験の少ない学生にとっては特に必要であり、卒業前演習に限らず、日々の実習で意識して実践力を養うよう関わっていた。最終確認として、卒業前演習にて基本的な技術を振り返りながら自己の強みと課題を明確にし、患者中心の看護の大切さについて考え就職に向けた心構えができたと捉える。

9. 社会への貢献 (2.6)

母体病院や近隣施設と、情報共有や演習用モデルの貸し出しによる現任教育への支援、体育館などの施設共有を通じた連携・協力はなされている。しかし、一昨年度、昨年度に引き続きCOVID-19による影響は大きく、感染防止策をふまえ、他者との交流を控える必要がある環境は続いており、対外的なボランティア活動は難しい状況にあるが、非接触可能なボランティア活動は積極的に進められており、ペットボトルキャップ回収については学生達の努力の成果も見られた。一昨年度からの交流控えもあり、学校・学生ともに、地域との連携や国際的視野を持つための工夫が滞ってしまっており、交流が可能となったときに、学生が少しでも活動していく機会が得られるよう、得られた情報を学生へ提示し、広報活動・参加の呼びかけを行い対応していく予定であったが、今年度も対外的な社会貢献は難しかった。

10. 研究・研修活動 (2.8)

事前申請することで、研修活動時間や助成金制度など保障はされており、研究・研修活動への取り組み環境は保障されている。また、全教員がNHO東海北陸の看護教員との授業研究活動の際は、研究内容や資料などの情報共有を行うなど積極的に取り組んでいる。年度末にその成果を各グループで発表しており、毎年、国立病院総合医学会での発表に繋がっている。研修や学会のリモート開催が定着してきており、各教員が専門領域における教育研究活動の場として活用しているが、教員が行う研究発表や論文投稿などの実績は少ないのが課題となる。今年度、外部講師としての活動等はできなかったが、各教員、専門領域における課題を明確にしながら授業研究を行い、学生指導を行った。社会のニーズを把握しながらその状況に則した教育を行っていく為にも研究をする風土について今後も醸成していく。

11. 研究・研修活動 (3.7)

自己点検・自己評価の中間評価を共通認識し、実施した。今年度もコロナ禍での学校運営で、学生にも医療従事者としての責務が求められ、保護者から学校側の感染防止対策が厳しく、理解し難いとの意見をいただく事もあったが、その都度説明し理解が得られるよう努めてきた。学校の体制で学生が不平等にならないよう、変化する感染防止対策に合わせながら教員間で検討し、統一した考えのもとに学生、保護者に説明を行い、同意を得て連携をとることでクラスターの発生なく、3年生全員が卒業することができたと考える。